

身体知の実践と継承

いまこそ「職人の叡智」に学ぶべきとき

柴田 庄一

はじめに

このところ「ものづくり大国」の大看板を根底から顔色なからしめる不祥事が相次いで大きな物議を醸している。とりわけ大手自動車メーカーによる度重なるリコール隠しは、即、人命にかかわる由々しき事態とも直結しかねないものだけに、もはや怒りを乗り越えてほとんど呆れ果てるしかない体のものであった。それにしても、その本質的な原因は、果たして、本当にしっかり突き止められたと言えるのだろうか。なるほど発覚直後の再建計画には、たしかに資金繰りやら人減らしについての数字が踊ってはいる。とはいえ、そもそも肝腎要^{かなめ}の、欠陥車から脱却すべき開発製造部門の抜本的な改善策に関しては、残念ながら寡聞にして知らされていないというのがお寒い実情ではなかったろうか。むろん直接の因果関係として、製品管理の杜撰さや利潤追求にともなう原価計算の無理が祟ったことはほとんど自明の事実であろうが、実のところ、その背景に、より一層深刻な事情が潜んでいたのではないかと忖度される。それは、他でもなく、「ものづくり」の根幹にかかわる人とその技能に関する根本問題であって、仮に、この点にこそ死角ありきとするならば、その解決にはなお長期にわたる粘り強い課題の追求が見込まれなければなるまい。¹⁾

1 二つの重大問題とその相互連関

リコール隠しにまつわる難題^{アボリア}は、むろん多岐にわたるが、さしあたっては二つの問題点が指摘されるべきであろう。ひとつは、度重なる欠陥車隠しを意図

的に行なってなお^{てん}恬として恥じない企業体質の問題であり、いま一つは、そもそもその元凶となった欠陥車を何ゆえに防げないのか、しかもどうして出荷前に見抜けないのかという根本的かつ本質的な問題である。前者は、いわば悪質な「確信犯」であり、もはや論外というしかない性格のものであるが、とりわけ後者は、よもや望んで欠陥車を量産しているのではあるまいから、状況証拠から見て、さらに憂慮すべき内情をも示唆するものと受けとめなければならない。それというのも、車商品ならびに部品の製造・管理に関連し、そもそもその能力や技量は本当に大丈夫なのかが疑われても致し方がない事態だからである。（こうした懸念は、その後、ほどなくして再度の「作業ミス」やら「再リコール」というかたちで現実のものとなり、残念ながら事態は何らあらたまっているわけでないことを強く印象づける結果となった）

ところで、上記の二問題は、前者が企業倫理に、後者が純粋に技術レベルに関わるといった風に、一見したところ、相互の関連性はほとんど窺われないかのように見えている。しかしながら、実は、両者は、まったく同じ根をもつ問題の盾の両面ともいうべき性格のものなのかも知れないのである。ここでは、そのような問題意識に立脚し、ひとり一企業のスキャンダルというにとどまらず、おそらくは日本の「近代化」それ自体ともまた、あながち無関係ではありえない本源的な問題の所在について若干の考察を試みたい。

2 「財閥解体」と「企業集団」としての復活

よく知られているように、第二次世界大戦の敗戦処理にいたるまで、三井、住友と並んで「三大財閥」の雄をなした「三菱」は、明治六年、岩崎弥太郎の創業になる「三菱商会」を母体に発展したものであるが、奥村宏の最新刊『三菱とは何か』（太田出版）によれば、終始一貫、「国家の保護のもとで」事業の拡大を図っていったとされる。それは、日本の近代化の上潮に乗り、「政商」として官業払い下げの恩典を享受するとともに、時の有力政治家や軍部とも結びつき、「戦争経済」と共にあったということでもある。そのおかげも手伝い、敗戦時の三菱重工業は、四十万人の従業員を抱えるマンモス企業へと大変貌を遂げており、まさに「日本の戦争を支えた一大軍需廠」として「戦争力そのもの」（141 ページ）に他ならなかった。戦後においてもまた、「三菱」は、財閥解体にともない、岩崎家の「一族支配」を離れることになったとはいえ、朝鮮戦争に起因する「特需景気」を「起死回生の妙薬」として息を吹き返し、「旧三菱財

閥傘下にあった企業間での再結合が行なわれ、企業集団として復活してくることになる」(149 ページ)。その結果、その後においても「国家とともに歩む」を合言葉に着々と事業規模を拡大し、経営の多角化を図るとともに、一九九七年、いわゆる「持ち株会社」の解禁とともに、一大コンツエルの地位を取り戻すまでに至っている。(そして、この度の三菱東京フィナンシャル・グループとUFJ ホールディングスの統合が、その総仕上げとなることにはもはや何らの贅言をも要しないであろう)。

このように、戦前の「財閥」、戦後の「企業集団」と、一応その経営形態を異にするとはいえ、常に「国家の興隆とともにあった」「三 菱^{スリーダイヤ}」という企業の基本体質は、どうやら一向にあらたまってはいないのである。そうであれば、ここから派生する当然の課題は、何よりも「お上大事」の企業集団が、はたして無責任体制そのものに直結してはいないのかという疑問を解くことであろう。

『三菱とは何か』は、まさしくこの問題にメスを入れようと試みた代表例であるが、「国」や「上司」からの上意下達に唯々諾々と従うばかりの従業員に何ら責任感の自覚が生まれにくいとしても不可思議なこととは言えない筈である。それは、むしろ単なる道義心や徳義心の問題ではない。そうではなくて、そもそも「決断」という個人の主体的関与が求められることのない体制それ自体に^{はいたい}胚胎する、もはや骨がらみの宿痼^{しゅくあ}ともいべきものであり、そこでは、仮に犯罪性を問われるような事態に立ち至っても、個人の罪障感は限りなく稀釈されるということになってしまわざるを得ないからである。

3 「法人」という擬制と無責任体制の核心

『三菱とは何か』が明らかにしていることの内、ここでの論点と関連して興味深いのは、その無責任体制の所在についての二つの見解であろう。まず第一は、戦前、戦後の区別を問わず、「軍や国家を相手にする商売では相手が決まっているのだから、販売努力はあまり必要」としないがゆえに、「三菱の社風は伝統的に官僚システムになっている」(156 ページ)という指摘であり、もう一つは、(これは、何も三菱にのみ限ったことではないが)一般に戦後の企業経営それ自体が、そもそも「法人」という^{フィクション}擬制に立脚して運営されているという認識である。

先にも述べたように、何事であるにせよ、すべからく先例に倣い、国や上司の意を体してもっぱら実務をこなすことだけを本務とする「官僚システム」が、

責任感の自覚に到達しにくいのは無理からぬこととしても、後者の学説（法人＝会社本位主義）に関してはいささかの注意を必要とする。すなわち、「法人とは何か」を定義して奥村宏は、『最新版 法人資本主義の構造』（岩波現代文庫）の中で、たとえば次のように述べている。「人間は身体を持ち、意思を持っており、そして死んでいく。それは絶対に避けられないことである。ところが法人である会社には身体がなく、したがって意思もなく、論理的には死なないで永遠に存在し続けることができる。法人はいうまでもなく法律によって人格を与えられたもので、人為的に作られた存在にすぎない。ところがその法人があたかも人間＝自然人と同じように行動し、社会的責任を果すという」（4 ページ）。こうして、「その法人である会社が従業員である人間をなかば強制的に働かせ、従業員はその会社に対して忠誠をつくし、『会社人間』になっていく。そればかりか、法人＝会社は従業員ではない一般の人びとの生活にも大きな影響力を行使している」（45 ページ）。

ここでの指摘で見落とせないのは、生身の人間（＝自然人）が、何人であれいずれは死なねばならぬ有限の存在であるのに対し、法律によって人為的に作られた「法人」は、あたかも「死なないで永遠に」生き続けるかのような擬人的存在と見なされ、またそのように取り扱われているという点である。しかも、そのような法人が、会社にひたすら「忠誠」をつくす「会社人間」を輩出することになれば、そこでは、生き、悩み、考える生身の人間こそが軽視されざるを得ないということになろう。（余談ながら、こうした「擬制」に振り回される笑えない悲喜劇は、ごく最近においても「日の丸・君が代」を権柄づくで強要しようとする東京都の教育委員会とこれをやんわりとたしなめる生身の人間天皇との関係にそっくりそのまま反復されている。²⁾ 戦前・戦中における「国家主義」の膨張がもたらした悲劇もまた、もとよりこの構図と何ら別のものではない）。

「法人」という擬制がもたらす隘路^{あいろ}は、さらに「法人資本主義」に胚胎する無責任体制において極まることとなる。奇妙奇天烈な二枚舌とでも称すべき屁理屈がそれである。すなわち、「責任の主体になれるのは自由な意思を持った個人だけである。法人である会社には身体もなく、意思もない。その法人が責任の主体になるということはありません」（『三菱とは何か』38 ページ）との見解に立ち、「犯罪を犯すのは意思があるからで、意思があるのは頭脳があるものに限られる。頭脳のあるのは身体を持っている人間で、法人には身体がなく、頭脳

もない、したがって意思がなく、犯罪という行為はできない、というのである」(41 ページ)

「こうして企業の社会的責任論で、企業が責任の主体であると言いながら、他方、刑法では企業は犯罪の主体にはなりえないということになっている。このような矛盾した考え方がまかり通っているのが日本である。その結果、欠陥車によって人を殺したにもかかわらず、三菱自動車は現在なお自動車を製造し、販売し続けている。(中略)会社＝法人という不思議な存在がこのような奇妙な現象を生んでいるのである」(41 ページ)。もはや「^{ベテン}詐術」とでも呼ぶほかはない噴飯ものの悖論理^{ほつ}というべきであろう。

このように「法人」が、その又工的論理をはびこらせるとき、ひたすら忘れ去られていくしかないのが、生身の人間(＝自然人)という個別的な存在である。ところが、実は、この点にこそ、(後に詳しく見るように)他でもなく「ものづくり」精神の根幹をなす技の体得とも密接に関わる問題点が隠されているのだ。なぜなら、「体得」するとは、文字通り「からだ」に沁み込ませて覚え、「身に付ける」ということであって、そうであれば、「職人技」の体得を可能とするのは身体を有した生身の人間を措いては他になく、「身体もなく、意思もない」「法人」には、そもそもそのような技能を持てる前提条件が備わっていないばかりか、自ら伝承していける性格のものでもありえないことはあまりにも明らかだからである。

では、「職人技」というのはいかなる特性をもつものなのか、また、それを身に付けるとはいったいどういうことを意味しているのだろうか。まずは、技術と技能の関係を考えるところから始めたい。

4 「技術」の普遍性と「技能」の固有性

周知のように、近代以降のめざましい経済発展をもたらした「産業革命」は科学技術と近代特有の合理的思考に立脚したものであるが、それがまた、世界的規模での平準化を招来したのは、そもそも「技術」それ自体に一定の普遍的合理性が内包されており、そうであるがゆえに、地域を越えた伝播や移入が可能であったことに起因する。とはいえ、これをどのように使いこなし、いかに活用していくかは、あくまでも人に密着した「技能」の領域に属しており、そこでは、人と人を取りまく環境という具体的な「場」のもつ固有性や個別性をとうてい無視するわけにはいかないであろう。³⁾ それというのも、「技能」と

は、いわば「一定の制約条件をそなえた環境（状況）の下で特定の目的意思をもって遂行される実践的行為およびその能力」とでも定義するしかない性格のものであって、その意味では、すぐれて状況依存のかつ環境相関的な事柄だからである。それは、自動車の運転や競技スポーツ等における運動的行為にだけでなく、内的ともされる認識行為（たとえば、絵画や演劇の鑑賞や文章の読解）にも当てはまるもので、いずれも脈絡や文脈というファクターを加味することではじめて十全に達成されうる点にその共通性が見出される。それゆえ、「技能」の習得には、まずは人が、当事主体としてその中に身を置くことが前提条件となり、ひいては環境（や状況）全体の意味を洞察し、目標達成に不可欠なスキルを工夫する諸能力の涵養こそが必要とされるのである。そのことをもっともあからさまに体現していると目されるのが、他でもなく「徒弟性」という名の育成システムに他ならない。

5 「職人技」という熟練技能 目利き腕利きの育成

ものみなすべて機械化を旗印に、その存在ですら駆逐せられんばかりになった今日からはほとんど想いも及ばないことであるが、近代化以前の日本にあって、とりわけもっとも活況を呈した江戸時代においては、おびただしい数の職人による^{なりわい}生業の世界があった。

たとえば鈴木章生『江戸の職人』（青春出版社）によれば、江戸期享保の頃（18世紀前半）には、「全人口に対する職人の数が、江戸は約二十五パーセントで、大坂は約五〇パーセント」（66ページ）に上ったと伝えられるほどの盛況ぶりであったという。しかし、誤解してならないのは、そこで目指されていたものが、ともすればマスプロ教育につきものの粗製濫造とは似ても似つかぬ、長期的で息の長い人材育成であったという点であろう。たとえば「法隆寺の鬼」とも呼ばれ昭和の大修復を手がけた宮大工の棟梁西岡常一の場合、「三年くらいは道具こなしを仕込まれて、四年目ごろからほんとうに仕事をちょっとさしてもらえという程度」（『斑鳩の匠 宮大工三代』平凡社ライブラリー、331ページ）の悠長さであったとされる。つまり、一人前になれるまでにはほぼ十年の修行期間が見込まれており、技の習得と伝承は、師弟ともども起居を共にする「作業の現場」でじっくりと培われるというかたちを常態としたのである。⁴⁾ しかも、師匠は、言葉をもって手取り足取り教えるのではなく、あくまでも^{モデル}範型を見せるだけで、弟子は、見よう見まねの反復練習（すなわち見習い）を通して

手順や段取りを覚え、さらには仕事の全体像をも表象できる能力を培うことが求められた。その際、習得すべきは、むろん対象となる学習事項の個々の細目にのみとどまるものではない。たとえ手本の模倣とはいっても、師弟ではそもそも身体条件ひとつでさえまったく同一ではありえないので、おのずから師匠とは異なる自己能力の吟味が必要となり、自ら差異に気付き、納得づくで矯正を図る工夫こそが不可欠となった。かくして、「職人技」という熟練技能の習得は、あくまでも現場に身を置き、その雰囲気にも馴染むとともに、徹頭徹尾身体に沁み込ませて（身に付ける、腑に落ちる）はじめて完成する体のものであったと言えるだろう。そして、そうすることが、実は、経験によって体得すべき身体知の、もっとも合理的な学習方法に他ならなかったのである。⁵⁾

（その当然の帰結として、何らかの異常や不具合が生じたような場合には、ほとんど直観的に問題点を察知し、即座に身体的な拒否反応を示せることが、目利き腕利きを本領とする職人たる者の真面目というべきものであった。なぜなら、本来の職人氣質にとって、手抜きや不本意な妥協など決してあってはならないことであり、職人のプライドがというよりも、むしろ体得された身体知こそが、ほとんど本能的ともいえる素早さで反乱を起こすのだからである）

6 素材との対話 工法の選択

それにしても、身体をもつとは、いったいどういうことを意味しているのだろうか。それは、天空の超越的な高みに浮遊しうるというのとは正反対に、時間的にも空間的にも否応なく具体的な現場に身を置くほかはないという宿命のいわば同義語なのである。むろん、そのことは、幾多の障害とも無縁ではありえないが、むしろ制約をこそ逆手に取ることによって新たな工夫を生み出す利点をも有している。

たとえば、身体知の基底をなすと考えられる環境への馴染みや道具との一体化を実現するには、そもそも現実の「場」に潜入し、親しく素材と触れ合い、用具に対してもこよなく愛情を注ぎこむことを日常としなければならない。そうすることではじめて用材の癖や素性をしっかりと把握し、それぞれの特性を活かすに足るだけの不可欠な前提条件が整ったことになる。興味深いことに、それが庭づくり（佐野藤右衛門『木と語る』小学館）であれ、杜氏や味噌製造工、あるいはまた石積工の場合であれ、いかなる技能の分野においてもほぼ異口同音に語られるのが、素材との対話の重要性である。⁶⁾ そこでは、音を聴き、臭

いを嗅ぎ、触感を確かめ、最後は舌で味わうといった風に、五感のすべてが総動員されるとともに、時に応じて手足や腕、さらには身体全体までもが達成目標に合わせて差し向けられることになる。⁷⁾ そうした中であって、究極の現場主義ともいえるものが、宮大工の家訓に伝わる「堂塔建立の用材は木を買わずに山を買え」との教訓に他ならない。

西岡常一によれば、木というものは、単に樹木の種類別にというだけでなく、どのような条件下に育ったかによってもそれぞれが違うので、一本一本の個性を十全に活かして使うには、「谷の木、背の木、あるいは南側の木、北側の木ということで、木の性質を見分け」(『斑鳩の匠 宮大工三代』、119 ページ)る能力が必要不可欠だと述べている。それというのも、「木の育つ場所によって、峠の木は強いし、中腹の木はちょうどええし、谷の木はやわらかいと、強い弱いがあるわけです。また山のむきによって、東側の木、西側の木、北面の木、南面の木と、おのおのみんな性質が違いますわ。これは北側に生えた木やからやわらかい、これは造作材にむけよう、こいつは南側の日のがんがん当たるところで育った木で材質は非常にかたい、だから柱にしようというような目安があるわけすな」(134 ページ)。したがって、こうした知見を首尾よく実行に移すためには、どうしても植生の様態をつぶさに観察し、木材を用途別に仕分けるといふ基礎作業が欠かせない。その結果、実際にも彼は、樹齢千年を優に超える檜の太木を求めて台湾の奥山にまで分け入り、自ら買い付けに当たったという経験を持っている。

では、望むべき用材さえ揃えば、それで万全なのかといえ、むろんそういうものでもない。素材を生かすも殺すも加工次第であってみれば、実は、ここからこそが、「手に職を着けた」者の文字通り腕の振るいどころということになる。その際、真っ先に問われるのは、工具や工法の選択と道具の使用法であるが、この点においても、西岡常一の発言には眼を見張らされる所見が数多く鑲められている。因みに『木に学べ 法隆寺・薬師寺の美』(小学館文庫)を引けば、飛鳥の匠が、日本の湿潤な風土性や木の材質をよくわきまえ、大陸の技術を鵜呑みにしないで軒を深くするとともに、「木のクセを読む、木の育った方位に使うということ」(124 ページ)を忠実に実行していたのに比べると、時代が下り、現代に近づくにつれて「木の性質を上手に利用する心がなくなり」、「先人が考え、組み上げてきた木に対する知恵を無視して、形だけのおざなりなものになって」(西岡常一『木のいのち 木のこころ 天』新潮 OH!文庫、49 ページ)

しまっているのだという。その証拠は、法隆寺の解体・修理に携わった者には一目瞭然で、「室町あたりからだめになってき」、「江戸（慶長）のころの修理や木の扱いを見ていると、考えが現代に似て荒^{すさ}んでいますな」（同上、50-51 ページ）と指弾されている。

まったく同じことが、どうやら道具の使い方や現代の製材技法にもそのままのかたちで当てはまる。すなわち、そこでは、耐用年数への配慮がまったく働いてはいないのだと言われるのである。「いまの製材ではちょっとぐらい原材が曲がっておっても、真っ直ぐに挽いてしまって、寸法どおりにすうっとまっすぐに仕上げるから、木目が切れている。繊維が切られておる。飛鳥のものは曲がったものは曲がったままで割って使ってるんやからちゃんと上から下まで繊維がとおっています。そういう点で、材料の個々の力が非常に強い。だから今日までの生命があった。いまのような材料の取り方やったら、あるいは千年もどうかなという疑いも起こってきますな」（『斑鳩の匠 宮大工三代』、132 ページ）。すぐさま思い当たる節を取り上げてみても、たとえば木裏^{きうら}や木表^{きおもて}の区別を顧慮せずに、ただ力づくで製材した機械作りの板や柱は、たしかに効率がよいし、見栄えも悪いわけではないが、他方、木の癖がすっかり隠されてしまうので、早晚「暴れる」ことが想定され、決して特性を活かすことにならないばかりか、結局のところ長持ちにも繋がらない。⁸⁾ そのため、耐用性を優先的に考慮するなら、昔ながらの「ヤリガンナ」の使用法が推奨され、建材それ自体の癖を生かして上手に「癖組み^{くせくみ}」することこそむしろ最上の心構えだとされるのである。（そのことはまた、仕上げに当たり、タメや「遊び」といった何がしかの「冗長性」がいかに大切なものであるかを物語っていよう）

それゆえ、このような見方は、さらにまた現代の建築工法への忌憚ない批判にも及ぶこととならざるを得ない。「現在は鉄材というものに頼りすぎていますし、いまの建築学者の考え方や構造学というものは、今日の力ばかりを考えて、五十年むこう、百年むこうは考えてくれませんか。鉄材を入れんと許可せんということだね。私らのいうているのは最小限千年ということを考えてやっていますでしょう。だいたいいまの建築基準法というやつは、聞いてみたら二十五年くらいやそうやから。それに合わせての基準ですわな。そんなものと千年とは雲泥の差がありますわなあ」（同上、173 ページ）。そして、その揚げ句の果てに、「私ら檜を使って造るときは、少なくとも三百年後の姿を思い浮かべて造っていますのや。三百年後には設計図通りの姿になるやろうと思って、考

えて隅木を入れてますのや」(『木のいのち 木のころ 天』、74 ページ)と言挙げられるに至っては、その遠大な構案におもわず唸られることを禁じ得まい。

9)

7 全体像の構築と想像力の発動 設計図を「読む」ということ

ところで、各部材の癖や特徴がよく把握できるようになったとしても、それが、「ものづくり」(それは、言うまでもなく凡ての表現行為をも含むものである)の目標達成に活かされないのなら、いわば宝の持ち腐れでしかない。そこで問われるのが、細部をいかにして全体構想に生かしていけるのかの根本問題であり、そのことと関連するのが、設計図をどのように読めばよいのかという実践的課題である。(それはまた、楽譜や文学作品を「読む」という行為一般とも無関係ではありえない)。

設計図には、当然のこととして、具体的な寸法が数字で記載されているのが通例であるが、実際に木を削り、建材を組み立てて家を建てる現場においては、図面の寸法通りに仕上げればそれで済むというものではない。先述の通り、木の材質は、一本一本が違うので、すべてを画一的に取扱うというわけには到底いかないからである。西岡常一は、「たとえば、ある堂に隅木すみぎを入れるとしますな。隅木は軒のきの端はなを支える大事なところですよな。私がそこに使う木を見て、この木は少し弱そうだから少し上げておく、この木は強いからそのままでええということを言いますよな。そんなこと建築学者も設計士もようしませんわ。そればかりか設計図通り、みな同じにしないと気に入りませんよな。そやから法隆寺でもそのことはやかましく言うてました。しかし、なかなか説明してもわかりませんのや。そうやったら設計図の寸法と違うというんですな。」(『木のいのち 木のころ 天』、73 ページ)と嘆いている。過度にまでも計算合理性を信奉して憚らない近代精密科学の弱点を鋭く射抜いた現場からならでの評言と称すべきであろう。それはまた、目下のところ、画一化した規格を最優先するコンピュータ制御にもほとんど取り替えの効かない職人技の極意だと言っていい。

では、そもそも設計図を「読む」ということの意味は、いったいどういうことを示唆しているのだろうか。先にも引いたように、「三百年後には設計図通りの姿になるやろうと思って」完成図を想い描くのだとすれば、木材それ自体の撓しなりや撓たわみ、屋根瓦の負荷を担った用材の経年変化エージングをも的確に織り込みながら、

いまだ現前しない全体像をはっきりと表象できる強力な想像力が発動されるのでなければなるまい。ここには、見えるもの(この場合は図面の具体的な数字や建築用材である)に依拠しながらも、それを踏まえ、ついには見えないものをも理解するに至るという「読むこと」にまつわる深遠な問題性が顔を覗かせているのであって、当面、目には見えない非在のものまで想像すべきイメージ力は、つまるところ、企画全体のヴィジョンをもリアルに構想しうる気宇壮大なものであることを求められるわけなのである。¹⁰⁾ このことをもっともあざやかに示しているのが、法隆寺創建時の雄渾なスケールに他なるまい。「法隆寺を最初につくった人は、まず年頭においているのは伽藍ですわな。その伽藍を、ちゃんと塔はこれだけの大きさ、金堂はこれだけの大きさ、回廊の周囲はこれだけ、講堂はこれだけと、ちゃんと伽藍の地割りをするほどのえらい人が堂をやっているということでしょうな」(『斑鳩の匠 宮大工三代』、112 ページ)。

8 「暗黙知」と「創発」のメカニズム 「潜入」と「包括的統合」の論理

素材や道具の使用法にせよ設計図や文学テキストの読み方であれ、それらが、有意義な技能として十全な機能を果たしえたとされるのは、いずれの場合も、当面の手掛かりを踏まえつつ、目指すべき目標行為が達成された時にのみ限られる。それは、これまでに見られないまったく新しい包括的存在を生み出すという意味で、発見や発明にも通う創造的行為であるとも言えるだろう。このように、下位レベルの素材(=細目)を自在に用いながら、全体奉仕的に活用することにより、なお上位の目的遂行に資するよう組み替えを図ることができること、そのことが、取りも直さず「暗黙知」が体得されたことの具体的現われなのである。この間の機微について、マイケル・ポランニーは、その著『暗黙知の次元』(紀伊国屋書店)の中で、次のように書いている。「この調整過程のはたらきは、暗黙知が諸細目を統合する過程と似ている。なかんずくそれは、我々が心の中にもっている問題(とくに詩をつくり、あるいは機械を発明し、あるいは科学的発見を行うという問題)を見つけ、かつそれを解く過程と似ている。これらの問題は、まだ関係づけられていないいくつかの事物のあいだに、あるまとまりがひそんでいるという内感として、とらえられる。また、これらの問題を解決することによって、一つの新しい包括的存在が確立される。その包括的存在とは、一篇の新しい詩であり、あるいは新しい種類の機械であり、あるいは自然についての新しい知識であるだろう」(71 ページ)。その際、「上位のレ

ベルは、下位のレベルで見られない過程、つまり創発とよばれるべき過程によってのみ、生みだされる」(72 ページ)ので、両者のギャップを埋めるべく調整と統合を遂行する過程には、なおいくつかの解明しなければならない重要問題が残されている。

先述した通り、身体に染み込ませて覚える身体知としての技能は、ほとんど自動的に作動するものであればこそ、ひとしく「暗黙知」と考えられるが、注意すべきは、「暗黙知」が、決して無意識のものではないという一点であろう。

暗黙知は、その名の通り、たしかに「暗黙的」に機能するものではあるにしても、それは、必ずしも意識がまったく働いていないということを意味しない。意識してはいるのだが、それが焦点的にではなく、むしろ従属的もしくは補足的に作用し、あくまでも上位技能を成就するための下支えになるところに重要な眼目が潜んでいる。すなわち、下位レベルの技能がそれ自体を自己目的とするのではなく、相互に微調整を繰り返し、目指すべき上位の志向的目標を達成すべく協応的なバックアップの態勢を築くこと、それこそが、暗黙知の本来の役割ということになるわけである。そうであれば、それはまた、訓練の技法や習得法にも相応の示唆を与えることになる筈である。

あらためて言うまでもないことではあるが、技能の習得には、まずもって基本動作の徹底した反復訓練が必要とされる。とはいえ、最高度の身体技能は、単にマニュアルによるパターン認識に依存するだけでなく、独自の工夫と、そうやってよければ個性までもが求められるので、決して分析的思考や意識的コントロールによってのみ実現されるというわけにはいかない。それは、行為者の感性や想像力とも不可分なものであって、直観や閃きの領分ともまた密接に関係している。したがって、日常的な訓練をのみルティーンワークとして律義に繰り返すだけでも、ましてや、理屈や「頭」による学習に終始するのも充分ということにはならない。むしろ諸要素をまとめあげ、上位レベルへの飛躍を可能ならしめるには、意識に囚われることのないイメージ的統合の実現こそが不可欠で、それゆえに、当事者としての主体的関与とならんで、意識的差配を超えた、いわば「天啓」を求めて臨界に挑むといった勇氣もまた同様に無視することができないものなのである。

とはいっても、「天啓」などといわれるものが、何らの準備もないところに突然到来してくれるわけのものではもとよりない。「閃き」を喚び込むには、それ

相応の前提条件がなければならず、もう一方では、一瞬のワン・チャンスを実にものにする万全の瞬発力が予め整えられている必要があるだろう。そうしたことを考えるヒントになると思われるものが、ここでもまた、職人世界の現場感覚の中に認められる。

先述したように、職人たちが、仕事の流れを見極め全体像を想い描くようになれるのは、作業の現場に身を置く（＝潜入する）ことによってであるが、実は、そこにこそ、時々刻々その姿を変えるランダムな諸要素を首尾よく協応関係に導くための「勘」や「閃き」を招来するこの上もないチャンスが潜められている。なぜなら、基礎的技能の多寡のみならず、それぞれの具体的な局面において脈絡を読み、今ここで、何が求められているのかを瞬時に見抜き、即座にしかるべき行動を起こせるかどうか、取りも直さず「天啓」の裏打ちとなるものだからである。そこでは、既存の行動原理や経験則をも超えた直観的判断の重要性と、そうした閃きをもたらす「場」（「徒弟制」や技能の育成に関わる専門家集団など）のもつ潜勢力が、ふたつながらに要請されているのであって、「現場は宝の山」（『職人学』、168ページ）といわれる所以もまた、ここにこそあるのだと言っていい。

ただ、ここでも注意しておかなければならないのは、ともすれば、均しなみに捉えて済ませ勝ちであるにしても、技能は決してルティーンワークに終始するわけでは決してないという点であろう。その理由の一半は、旧態依然たる技を後生大事に墨守するだけでは、日々流動し、しかもそのレベルが不断に高度化していく新たな需要に対応することができないからというのがそれであるが、加えて、職人のほとんど骨がらみともなった性向が、無際限の熟達（＝考案や開発）志向を抑えがたいので、いついかなる場合にもこれでよしということには決してなりえようがないからなのである。職人たちは、いわば、古い皮袋に常に新たな酒を詰め替えながら、絶えず自己否定を重ねて永遠の革新（イノベーション）を試みようとしないではいられない存在なのだ。¹¹⁾ すなわち「その奥行きを極めようと努力する人だけが職人」（『職人学』、26ページ）なのだと思えば、「職人の仕事は創造」なのであり、「技能はそのように自己革新し、時には攻撃的ではあっても、決して固定的ではない。（中略）技能は“育つ”ものである」（同上、18ページ）。したがって、それはまた、いったんは「型」に入りながらも、ついには「型」を抜けることが目指される芸道修業のあり方ともすっかり軌を一にした性格のものだと言っていい。

むすびに 不断の「イノベーション」を担保するもの

「職人の叡知」をテーマに、いくつかの視点から考察を巡らしてきた本稿の最後に、なお忘れてならない論点が少なくともふたつは残されているように思われる。ひとつは、一朝一夕にはものにできない「身体知」が、本当に最先端の技能たりうるのかという疑問にまつわる問題であり、今ひとつは、職人は、ただの「専門馬鹿」にすぎないのではないか、との根強い思い込みに関わるものである。

まず前者については、小関智弘による諸種のルポルタージュが夙に紹介に努めてきた通り、大量生産の基礎となる最先端の木型や金型の制作は、せいぜい数人から数十人規模の町工場が専ら請負っているのだという事実を指摘するだけで事足りよう。百万分の一ミリまでを鋭く感じ取る感性は、熟練工の指先にだけ宿るもので、いかなるコンピュータにもいまだ太刀打ちできない精妙なナノテク技術を駆使しうる熟練技能をつかさどっているのは、実は、一見非効率で割りの合わない部分を受け持たされた中小企業に他ならない。そこにこそ、社内外からの厳しい高度化要求を受けながら、需要と注文 工夫と考案 開発と創造といった好循環が稼動するに足りるだけの技術や技能を育てあげる「場」があって、それこそローテクがハイテクを支えるという皮肉とも思われる事態があたかも事もなげに現出しているようなのである。¹²⁾

しかしながら、後者の疑問については、なおいささかの検討を要するかも知れない。なるほど、今回の「耐震偽装事件」は眼を蔽わしめるもの以外の何物でもなかったが、こうした不始末が殷賑を極める社会的動向の背景に、なりふり構わず、利潤だけを追求して恥じようとしめない嘆かわしい世相を見落とすことはできまい。すでに何年も前にしたためられた塩野米松の『失われた手仕事の思想』（草思社）は、大量生産がもたらす陥穽^{かんせい}に関連し、今回の事態をするべく予告した次のような件^{くだり}を含んでいる。

工場の製品は均一で差がなく、作り手の顔がない。工場が送り出す製品の基本は効率の一言でくくられている。効率とは安さのことである。工場製品、大量生産品は消費者の選択の基準を、使い勝手や、美しさなどを置き去りにし、まんまと価格の競争だけにすり替えてしまった。安さのもとに、現代人は他の選択基準を捨ててひれ伏したのである。

もし、職人たちが使い勝手や形の美しさ、丈夫さを無視して品物を作り出した

としたら、笑い飛ばし、軽蔑したものである。そういうものは恥ずかしいものであり、そういうものを送り出すことは卑しいこと^{いや}であったのだ。

使い手もそうである。自分の体に合わぬものを使うことはなかった。着るものが合っていなければ無様^{ぶざま}であったし、手道具であればすぐさま作るものに影響した。安いからといって、どうしてもいいものを使うことは効率を悪くすることであり、結局は損につながったのである。(219 ページ)

ここで指摘されているのは、(今ではすっかり「失われ」てしまったかに見える)職人としての矜持^{きやうじ}であるが、求められるべきは、ひとえに「一人前の職人になることはその職業にあった体を作り、その職業に見合った技を体に覚えさせ、いつでもその仕事のことを考える姿勢を習慣づけ、そしてその職業で生きるための倫理と社会の中で自分たちが果たす役目を知ることにある」(同上、222 ページ)とされるが如き職人の倫理観ばかりでは、おそらくはない。

なるほどすぐれた職人は、ひとかどの専門家でなければなるまいが、決して狭い見地に凝り固まった単なる「専門馬鹿」であっていいわけではない。じじつ、飛鳥の匠たちが、頭でっかちな観念主義に陥らずに済んだのは、あくまで、人と場の具体性に根差した生活者でも、また一級の教養人でもあって、つまるところ広義のジェネラリストであったことに拠っている。まさにそうであるがゆえに、大陸とは異なる湿潤な風土性を考慮して、軒を深くしたり、垂木^{たるぎ}を長くして再利用に備えるなど、単なる猿真似に終わることがない工夫に余念がなかったのだし、また、二、三百年単位にものぼる長期の循環を考えることで、環境にもっとも親和的^{フレンドリー}でありえたとも言えるのである。そして、今ひとつ重要なことは、歴代の職人たちが、まぎれもなく「身体知」としての職人技を磨くことを常態とすることにより、生身の人間存在は、あくまで自然の一部をなすものであり、たかだか百年も経たぬ内にふたたび土に帰っていく存在であるという生命観をしっかりと把持していた点であろう。人と人を介した技の伝承こそが重要視されたのも、実は、そのことの当然の帰結ともいうべきものであり、効果的な技能継承のあり方として、二十年毎に執り行われる伊勢の式年遷宮にも相応の合理性があると見なされる根拠もまたここにこそあるのだと言っている。

それにしても、身近な日常生活の場面から、急速に職人の姿が消えていって既に久しい。その背後には、むろんのこと一世紀以上にわたる「近代化」とともなう社会生活の大変動が潜んでいるが、それは、道具が機械に取って代わら

れ、機械もまた、外からは容易に窺い知れないブラックボックスと化すことによって、それに携わる人びとでさえ、手を動かし、五感をはたらかせ、からだ全体を使うといった機会が激減している事情とも相即している。こうした身体感覚の衰退は、たとえばフィットネスクラブで少々筋トレに励んだぐらいでは、到底、押し留めがたい性格のものであるだけに、なお一層悩ましい問題を抱えているのだと言え言えようが、それは同時に、適切な判断力の弱体化ともまた決して無関係ではありえない。

現代人は、とかく画一的な規格商品に馴染^{なず}むあまり、対象を愛着もなく「消費」しては省みず、ただただ均一的に眺めるだけでよしとして、結局のところ、製品をしっかりと見分ける眼識それ自体がますます衰えてきているのではないかと危惧されるのである。職人とか工人という存在は、元来、オーナーからの注文があってこそ成り立つ職業であってみれば、彼らの技能を十全に活かすためには、目利きの施主や顧客の存在と、伝承され続ける文化資源に対する畏怖や崇敬の念がその前提になければなるまい。すなわち、伝統的な技や文化の継承には、少なくとも、人材が絶えないこと、素材がなくならないこと、しかし、何よりもまず、そのことを必要とする需要のあることが不可欠で、仮にそうでないなら、折角の知恵の宝庫も、しかるべく活用されるだけの「場」や機会に恵まれないということになってしまわざるを得ないであろう。（たとえば、資源の枯渇しかねない漁場や、貴重な先行資料をせっかく数多く収蔵していながら、さして関心を持たれることのない古文書館^{アルヒーフ}といった具体例を考えてみれば、あるいはもっとも分かりやすいかも知れない）

思えば、技能の伝承者をどのように確保するのかという課題ひとつを取ってみても、「合理化」を錦の御旗に、否応なく現場から追いやられる熟練工のリストラや闇雲なパート工の拡大は、もとより由々しき事態には違いない。¹³⁾ しながら、もう一方では、職人の工夫を生かすに足りるだけの受け皿となる充分な需要が見込めるようでないならば、単にその点からしても、技能の継承は到底、覚束ないということになるだろう。その意味では、永六輔がかねてより機会あるごとに警鐘を鳴らしている通り（『職人と語る』小学館文庫、ほか多数）「大衆消費者」であるよりも、しっかりとした「民衆」の心をそなえた目利きの支援ユーザーたれとの要請は、実は、他でもなくわたしたち自身にこそ向けられているのかも知れないのである。

注

- 1) 本稿を構想し執筆を進めた 2005 年度は、その後も、過密ダイヤと過重な労務管理に起因する JR 福知山線の脱線事故や、ひたすら儲けること以外念頭にない「耐震偽装建築」とやらの不祥事が次々に頻発し、図らずも「職人」払底の実情がいかに根深い病因を抱えたものであるかを白日の下にさらけだす無惨なまでの結末となった。こうしたまさに「立ち腐れ」とでもいう他はない惨憺たる事態こそ、実は、凄惨な殺人事件が一向にひきも切らないどんづまりの「世相」にもあきらかに反映しているのだと見なくてはならない。
- 2) それにもかかわらず、相変わらず処分を伴う破廉恥な強制が押し付けられている教育現場の憂うべき状況に関しては、たとえば永井愛の最新作『歌わせたい男たち』(二兎社上演)が、喜劇仕立ての風刺にまぶしつつ、あくまでも鋭く肉薄する姿勢を崩していない。今こそアクチュアルな睨目すべき現代演劇と言うべきであろう。
- 3) 長らく旋盤工を勤め上げた経歴をもつ作家の小関智弘の手になる『職人学』(講談社)には、「記号や数値で表現することのできる技術とはちがって、技能は常に人の体温と共に存在している」(185 ページ)との記述がある。
- 4) 西岡常一のほとんど唯一の弟子ともいえる小川三夫もまた、「通常、道具を意のままに使えるようになるまでに十年はかかるといわれている」(『木のいのち 木のこころ 地』新潮 OH!文庫、180 ページ)と述懐している。
- 5) たとえば、『失われた手仕事の思想』(草思社)の著者塩野米松は、「徒弟制度の基本は、教わりたい弟子が師のところで技を見て覚えることにある。覚えたものだけが次の工程に進むことができる。師の教え方は単純である。そばに置いてやって見せることと、間違ったときに叱ることである」(225 ページ)とした上で、弟子はすなわち、現場の雑用をこなす傍^{かたわ}ら、「師匠の動きや目の動き、話しぶり、口調で、次に何をほしがっているか、何をしようとしているかがわかるようになる。手順や段取りを気配りすることで覚えていくのである。そしていつの間にか同じことを思い考えられるようになっていくのである。」(同上)と書いている。さらに、修業法の要点に関しては、「技の習得は、体を訓練することである。できる体を作ることが修業である。これは頭で何も考えなくていいということではない。師匠のようになぜできないのか、できない理由を考え、試行錯誤を繰り返す。それでも簡単にはできない。簡単にはできるわけがないのである。体が記憶を終えていないのである。人はさまざまなことを考える。しかし、工夫や反省だけでは体は動かない。まず、弟子たちはそのことを知らなければならない。」(212-213)と指摘している。また、すでに引いた『職人学』の著者小関智弘もまた、技の熟達には知識よりも知恵が大事だとし、「知恵は訓練だけでは得られない。問題に直面している現場に居合わ

せ、ものと向き合ったときにはじめて湧いてくるのが知恵である。熟練は器用さとはちがう。手の技プラス知恵で、困難を越える問題解決能力をもっている職人こそ、熟練工というにふさわしい」(130-131)との持論を開陳している。

- 6) 渡辺文雄『仕事の原点』(中央職業能力開発協会)の聞き書きが伝えるところでは、石の発する声や 麴^{こうじ}の囁きを聞くことの重要性だけでなく、たとえば清酒づくりには、「匂いを嗅ぐ鼻勘、味をみる舌^{べろ}勘、見て観察する視勘、音を聞く耳勘、温度など手で触って確かめる触勘」(296)までもが必要であるというすぐれて具体的な実際例が報告されている。
- 7) 一例として、金魚売りが天秤を一人前に担げるようになるのにも、「四、五年の年季を要する」と聞けば、単に筋肉や基礎体力の鍛錬だけにとどまらず、リズムやバランスといった諸感覚の調整、つまりは「コツ」の会得がいかに重要事であるかが明白となろう。そこではすなわち、的確な素材の選択から道具との一体化に至るまで、ほとんど全身的な運動能力が求められるということになるわけなのである。「木に粘りがあり、アオリがある方が足の運びがいい。アオリのない木は重量がもろに肩にかかって体が疲れるし、歩きづらい。熟練した人は天秤棒を自分で削り直して使う。天秤のアオリに合わせて肩と腰で調子を取り、足は外側に開き気味にし、交差させるようにして歩く。水槽の水をあおらせず、金魚を池にいる状態で売り歩くのがコツ」(遠藤ケイ『男の民俗学 職人編』小学館文庫、178 ページ)だとされるのがそれである。職人にとって道具は肉体の一部とも、あるいはまた身体の延長ともいわれる所以であろう。
- 8) 渡辺文雄の『旅でもらったその一言』(岩波現代文庫)によると、伊勢の式年遷宮に携わる神祭具屋が、「へぎ」といわれる曲げ物を作るうすい板の作り方に関連し、次のような述懐を残している。「檜の丸太に切れ目を入れて、その切れ目に滝の水を当てます。するとその水の力で丸太が割れます。時間はもちろんかかりますが、こうするとその木の持っている自然の木目通りに割れるんどすわ。こうして作り上げたへぎは自然で素直で丈夫どす。無理矢理に機械で作ったへぎはとてもかないまへん」(49 ページ)。
- 9) このように辿ってみれば、馬鹿のひとつ覚えのような「聖域なし」を合言葉に、およそありとあるなべての領域に目先ばかりの競争原理を導入し、ひたすら効率一辺倒の政策を押し付けるしか能のない小泉(竹中)内閣なぞ、いかに史上最悪のうすっぺら政権でしかないかはたちどころに判明する。(そして、その伴走事象のなれの果てが、このほど出るべくして発覚した「耐震偽装建築」であることには、もはや多言を要しまい)。遺憾ながら、長期構想にまったく欠けた内容空疎なごり押し政策の下では、過労死が減らないどころか、「ニート」やフリーターが増え続けるのもむしろ理の当然であり、^{にわか}「俄仕立ての少子化対策など、ますます絵に描いた餅で

しかありえまい。(それは、むろんのこと、様々な意味での社会不安に繋がろう)。ましてや体得するのに十年はかかるとされる身体知の伝承が、ひたすら貧寒たる見通ししか持ち得ない現状に鑑みれば、心ある人々が、自ら率先垂範し自衛の手策を講じることこそ、もっとも不可欠な喫緊事と言わなくてはならない。

序^{ついで}でながら、こうした単に依怙地なだけのかたくなな視野狭窄に関しては、たとえばメルロ＝ポンティが、「心理的硬さ」をキーワードに、何と『幼児の対人関係』（みすず書房）と題する著書の中で、とっくの昔にこの上もなく鋭利な検討を加えている。（『裸の王様』とならんで、今こそ、真っ先に推奨されるべき必読文献たるを失わない）。詳細については、そこでの考察に俟つことにしたいと思うが、この際、狂信的な二分法からまったく脱却できない未熟なパフォーマンスにうつつを抜かししていると、手酷いしっぺ返しを喰らうことになるばかりか、「反ユダヤ主義」に代表される人種主義をも生み出すに至り、ひいては全体主義^{ファシズム}に道を開くことにもなりかねないことを、しっかりと肝に銘じておくべきであろう。

- 10) こうして、真の職人には、図面を「読む」だけで仕事の全体像を「理解」できるという能力が欠かせない。それゆえに、たとえば、「木型は金型と同様で、ふつつ木型用の図面というものはない。製品の図面を与えられるだけである。その平面図から立体的な形をイメージする。そして、その製品を作るためにはどのような木型にすればよいのかを考え、設計して作る」（『職人学』、229 ページ）ことが重要だとされるのである。
- 11) 「イノベーション」の実態について、たとえば『職人学』は、次のように記述している。「こうして、古い技能の上に新しい技能を積み重ねて、新しいものづくりをする。熟練は絶えず自己否定しながら革新する。そしてまた新しいものづくりには教科書がない。でも、教科書がないからかえって、固定観念にとらわれずに、常識的には考えられない発想が生まれる、ということもあり得るだろう」（177 ページ）。「その意味で工場の熟練とは新しい技能である。伝統的な技能にとどまっていないで、常に新しい、よりすぐれた技能を獲得して、伝えられた技能の限界をさらに広げようと努力する技能者だけが、熟練工と呼べる。だから熟練はいつも生きている。時代を生きているし、空間を生きている。だから熟練は戦闘的なのである」（147 ページ）。
- 12) 現場ならではの融通無碍な知恵の生かしようについて、たとえば小関智弘の近著『職人力』（講談社）は、次のように伝えている。「それぞれの現場には、蓄積されたノウハウがある。現場の職人たちは、日ごろそれを技術情報などという言葉ではなく、いわゆる暗黙知として蓄えている。いつ、どんなときに、どのように役立てられるかという自覚さえなく、しかし確実に蓄えてきたものづくりの知恵がある。それが、『こんなものをつくろうと思うんだけど』と相談されて、『どれどれ、そい

つは面白そうだな』と身を乗り出したときに、ひょっこり顔を出す。自覚していなかったことが目を覚ます。あ、俺にもこんな才覚があったかと、本人もびっくりするような工夫が、石を投げられなければ波の立たない池の水面のように、静かに存在しているものである。場数を踏んだ職人の知恵は、そのように存在する。」(150ページ) 難問に直面することではじめて起動する「創発」のメカニズムの機微について、その具体例を見事に示した一節というべきであろう。

- 13) 遅まきながらではあるにしても、ごく最近、どうやら数多くの退職者が見込まれる「2007 年問題」に対する危機感をきっかけとして、技能の継承問題を真剣に考え直そうとする機運がようやく動き出しつつあるという報道がなされるようになってきている。